

274 労作性狭心症における各種抗狭心症薬の作用機序の検討

梅沢滋男, 城山暢博, 雨宮 浩, 藤原秀臣
(土浦協同病院・循環) 平井正幸, 関 延孝
(同・R I 室) 谷口興一 (東医歯大・二内)
広江道昭 (東女医大・放射線科)

I S D N (I), Nifedipine (N), Propranolol (P) の心筋虚血に対する有用性を運動負荷心プールシンチを用い検討した。対象は, 冠動脈に有意な狭窄を有し ^{201}Tl -SPECTにて再分布を認めた労作性狭心症 21 例 (うち既往に梗塞を有するもの 8 例) である。SPECT 施行時の Total work load より各々設定した運動負荷プログラムにより, 無投薬時 (C) 各種薬剤投与時に 2 段階の負荷心プールシンチをくりかえし施行し, EF, EDVI, PER, $1/3$ PFR, Double Product (D. P), 心電図変化を指標とし各種抗狭心症薬の作用機序について検討した。EFはCでは運動負荷にて有意に減少したが, I, N, P 投与時には低下を示さず, Cに比べ有意な上昇を示した。D.PはPでのみ有意に減少を示し, EDVはI, N で小なる傾向を認めた。以上, 心プールシンチから得られる諸指標による検討を加え報告する。

275 後負荷軽減操作に対する虚血心の左室反応様式および内分泌的反応の検討—2音同期平衡時法を用いて—

小糸仁史, 谷口智通, 須永恭司, 木村 穰,
岩坂壽二, 栗本 透, 稲田満夫 (関西医大二内)
白石友邦, 小林昭智 (同大 放)

虚血心において後負荷軽減に対する左室の反応様式および内分泌ホルモンの変化から虚血心の左室心機能特性および心予備能を評価することを目的とした。

陳旧性心筋梗塞症 (OMI) 20例, 狭心症 (AP) 15例を対象とし, 安静臥位にて心電図R波同期および心音図2音同期平衡時法を用い, 血中ノルアドレナリン (NA) レニン活性 (PRA) をニフェジピン (セパミット) 10mg投与前, 30分後, 60分後に測定した。

OMI 群では30分値でLVEF, PER, PFRの改善とNA, PRAの上昇がみられたが, 60分値ではLVEF, PFRは元の値に復し, NA, PRAは低下した。一方, AP群では30分値のLVEF, PER, PFRの改善とNAの上昇は60分値でも持続した。これはOMI群の心予備能がAP群のそれよりも少ないことに起因すると考えられた。また, PERは60分値で両群でまだ上昇傾向にあるのにPFRは減少しており, 後負荷の影響は虚血心においては左室収縮機能より拡張機能へより早期に表われると考えられた。

276

Anthracycline系抗がん剤の心機能に与える

影響 — 心電図同期心プールシンチグラフィによる検討 —

古田敏也, 黒川 洋, 桜井 充, 桐山卓三,
加藤善久, 金子堅三, 近藤 武, 渡辺佳彦,
菱田 仁, 水野 康, 森川歌知子,
小野芳孝, 平野正美 (藤田学園 内科),
江尻和隆, 安野素史, 竹内 昭, 古賀佑彦
(同・放射線科)

Anthracycline系抗がん剤は悪性血液疾患の治療薬として重要な位置を占めているが, 心機能への悪影響が注目されている。悪性血液疾患22例において経時的に心電図同期心プールシンチグラフィを左前斜位より撮像し各種のパラメータ, すなわち収縮期の指標として①駆出分画 (EF)、②最大駆出速度 (Peak ejection rate)、③ Time to peak ejection、④ Time to end-systole、拡張期の指標として⑤最大充填速度 (Peak filling rate)、⑥ Time to peak fillingなどを算出し, Anthracycline系抗がん剤投与量との関係を検討し, どのような指標が心機能障害を鋭敏に表現するかについて検討した。

277 狭心症患者の運動耐容性に占める左室拡張機能の関与

中川博昭, 足立晴彦, 杉原洋樹, 窪田靖志, 稲垣末次
岡本邦雄, 勝目 紘, 伊地知浜夫 (京府医大 二内, RI)

狭心症患者の左室拡張機能が, その運動耐容性に関与するかどうかを検討するため, 労作性狭心症例を対象に, 運動負荷心プールシンチグラフィを施行し, 負荷時の左室収縮・拡張機能を検討した。75watt以上の負荷が可能な良好群 (I 群) と, 50watt以下で胸痛を生ずる不良群 (II 群) に分け, これらと健常群 (C 群) を対比した。安静時, 収縮期指標EF, PERには3群間に有意差はなかったが, 拡張期諸指標 ($1/3$ FF, $1/3$ MFR, PFR, TPF) は, II 群で有意に低下した。運動負荷時, EFは, I 群では負荷初期から中期にかけC群と同様に増加したが, 最大負荷時には減少した。II 群では初期からEFは減じ, 中期でさらに増強した。拡張期指標は, I 群はC群とほぼ同様 ($1/3$ FF及び $1/3$ MFR; 不変, PFR; 増加, TPF; 短縮) であるが, II 群は中期で, $1/3$ MFR及びPFRは減少し, TPFは延長した。II 群は安静時左室収縮能はI群に近似するが, 運動対容能は低下し, 左室拡張障害を安静時においても認め, 安静時の収縮機能に比し拡張機能が, 運動対容能の規定因子として, 重要であり, その関与がより強いと考えられる。